

大学生の人生観と人権意識

—鳥取大学学生意識調査結果から—

社会教育教室 生 田 周 二

University Students' View of Life and Human Rights

—The Results from the Survey on the Students' Consciousness of
Human Rights in Tottori University—

Syuji IKUTA

はじめに

「鳥取大学学生の人権問題(同和問題)に関する意識調査」は、「同和問題」(部落問題)を中心とする人権問題について、学生のこれまでの学習状況や様々な活動経験と相関させて、意識動向の所在を調べることを目的として、1992年12月に、鳥取大学湖山キャンパス(鳥取市)において実施した。基本的に各学部毎の授業時間を利用して調査票を配付し、記入・回収するという方法(一部、4年次学生については、依頼した教官に研究室の学生への配付・回収をお願いした。)で、表1の通りに調査票が回収できた。医学部については、3年次から米子キャンパス(米子市)に移るため、1・2年次のみを対象とした。それ以外は、できるだけ学年毎のバランスが取れるように、調査票の配付を心掛けた。なお、鳥取大学湖山キャンパス学生数(1992年度)は、4269人であり、調査対象者の比率は13.5%である。学部別では、教育学部17.8%、工学部10.0%、農学部13.4%、医学部30.0%となる。

なお、男女別構成比は、表2の通りである。年齢については、平均値が20.5歳、最小値18歳、最

表1 学部毎の学年別回収数と回収率

学部	1		2		3		4年次以上		計	
	人数	回収率	人数	回収率	人数	回収率	人数	回収率	人数	回収率
教育(735)	35人	26.7%	45人	34.4%	25人	19.1%	26人	19.8%	131人	100%
工(2069)	47	22.8	60	29.1	45	21.8	54	26.2	206	100
農(1215)	27	16.6	48	29.4	43	26.4	45	27.6	163	100
医(250)	47	62.7	28	37.3	-	-	-	-	75	100
計(4269)	156	27.1	181	31.5	113	19.7	125	21.7	575	100

()内は1992年度における在籍学生数

表2 学部毎の男女別構成比(%)

学部 \ 性別	男	女
教育	35.9	64.1
工	98.1	1.9
農	65.6	34.4
医	64.0	36.0
計	70.3	29.7

大値31歳となる。出身県については(無回答3.8%),

鳥取県 31.7%(男26.1%, 女49.4%)

兵庫県 14.1%(男16.6%, 女9.9%)

岡山県 8.9%(男9.5%, 女8.6%)

大阪府 8.0%(男10.5%, 女3.1%)

広島県 4.9%(男6.1%, 女2.5%)

島根県 4.7%(男4.6%, 女5.6%)

京都府 4.2%(男4.3%, 女4.3%)

山口県 1.7%(男1.8%, 女1.9%)

和歌山県1.4%, 愛知県1.4%, 静岡県1.4%, 福岡県1.0%, その他12.9%(以上合わせて, 男20.5%, 女14.8%)

である。しかし, 学部で大きな差があり,

教育学部: 鳥取75.8%, 兵庫5.6%, 島根4.8%, 岡山4.8%, その他4.8%

工学部: 兵庫22.4%, その他19.4%, 鳥取16.9%, 岡山14.4%, 大阪10.9%

農学部: その他25.6%, 鳥取23.1%, 兵庫13.5%, 大阪12.8%

医学部: その他26.4%, 鳥取25.0%, 岡山12.5%, 兵庫11.1%

という結果である。

第1章 大学生の人生観・社会観・参加体験

1. 人生観

まず, 「興味・関心」(4つまで○)について, 有効回答者数574人の内訳は,

「自分の職業・勉学」 43.9%(男37.0%, 女60.2%)

「自動車・オートバイ」 32.4%(男42.9%, 女7.6%)

「音楽」 31.2%(男33.7%, 女25.1%)

「友人関係」 29.3%(男25.8%, 女37.4%)

「スポーツ」 28.4%(男34.2%, 女14.6%)

「異性」 27.7%(男34.5%, 女11.7%)

「娯楽・レジャー」 27.4%(男29.3%, 女22.8%)

「技能・資格取得」 21.6%(男17.1%, 女32.2%)

「旅行」	18.6%(男15.1%, 女26.9%)
「グループ・サークル活動」	17.4%(男17.4%, 女17.5%)
「ファッションなどの流行」	9.6%(男 6.2%, 女17.5%)
「政治・社会問題」	9.6%(男10.4%, 女 7.6%)
「結婚」	5.7%(男 5.2%, 女 7.0%)
「その他」	4.0%(男 4.5%, 女 2.9%)
「特にない」	3.8%(男 3.2%, 女 5.3%)
「子ども」	3.3%(男 2.2%, 女 5.8%)
「地域の問題」	1.2%(男 1.5%, 女 0.6%)
「労働運動」	0.5%(男 0.7%, 女 0.0%)

の順である。この設問は、性差が顕著で、性別に多いものから挙げると、

男：「自動車」、「職業・勉学」、「異性」、「スポーツ」、「音楽」

女：「職業・勉学」、「友人関係」、「技能・資格取得」、「旅行」、「音楽」

となり、女性に「職業・勉学」「技能・資格取得」が目立っている。

次に、「生きがいを感じる時」(3つまで○)については、有効回答者571人中、

「スポーツや趣味に打ち込んでいるとき」	51.3%(男55.7%, 女40.8%)
「友人や仲間といるとき」	45.0%(男45.3%, 女44.4%)
「団体・サークル活動に打ち込んでいるとき」	18.6%(男18.4%, 女18.9%)
「仕事・アルバイトに打ち込んでいるとき」	16.3%(男18.2%, 女11.8%)
「勉強に打ち込んでいるとき」	15.1%(男12.9%, 女20.1%)
「恋人といるとき」	14.5%(男10.9%, 女23.1%)
「社会のために役立つことをしているとき」	11.7%(男10.4%, 女14.8%)
「生きがいに感じることはない」	10.7%(男12.2%, 女 7.1%)
「他人にわずらわされず、一人にいるとき」	8.9%(男 9.0%, 女 8.9%)
「家族といるとき」	8.2%(男 5.5%, 女14.8%)
「その他」	4.0%(男 4.5%, 女 3.0%)

の順である。性差については、「スポーツや趣味」が男性に多く、女性に「恋人」、「家族」が目立つ程度である。

第三に、大安・仏滅などを気にするかどうかの「風習態度」は、次のように、「風習態度スコア」をとった。「全く気にしない」-2点、「あまり気にしない」-1点、「少し気にする」1点、「非常に気にする」2点として換算し、それぞれの項目の平均値を算出すると、下記の順で「気にしている」と言える。

「世間の目・うわさ」	0.1点(男 0.0, 女 0.4)
「手相・占い・お告げ」	-0.5点(男 -0.7, 女 0.1)
「因縁・たたり・運命」	-0.5点(男 -0.6, 女 -0.2)
「夢で見たこと」	-0.6点(男 -0.7, 女 -0.4)
「大安・仏滅の風習」	-0.8点(男 -0.9, 女 -0.7)
「家柄・筋筋」	-1.0点(男 -1.1, 女 -0.7)

以上のように、性差が明確であり、特に「手相・占い・お告げ」は、男女の平均値の差が0.8ポイントもあり、これは、「非常に気にする」と「少し気にする」を合わせると、男性32%に対して、女

性58.5%に達することからも、女性の占い志向が裏付けられる。

2. 社会観

まず、一般的に、親や周りからの「結婚への反対について」(1つに○)の設問では(無回答0.3%)、

「当人同士の合意で十分」	37.6%(男43.4%, 女24.1%)
「どちらかといえば当人同士の合意が尊重されるべき」	55.3%(男50.6%, 女67.1%)
「どちらともいえない」	4.7%(男 4.5%, 女 5.3%)
「どちらかといえば回りの意見が尊重されるべき」	1.6%(男 1.0%, 女 2.9%)
「回りの意見に従うべき」	0.5%(男 0.5%, 女 0.6%)

となる。性差は、男性に「当人同士の合意で十分」が多く、女性に「どちらかといえば当人同士の合意が尊重されるべき」が多いという差が見られる程度である。

次に、「男は外、女は家庭」(1つに○)についてどう思うかについては(無回答1.4%)、

「賛成」	4.0%(男 5.1%, 女 1.8%)
「どちらかといえば賛成」	41.9%(男52.3%, 女19.9%)
「どちらかといえば反対」	36.0%(男32.3%, 女46.2%)
「反対」	16.7%(男10.4%, 女32.2%)

となり、賛成派45.9%、反対派52.7%と拮抗した結果である。また、「賛成」2点、「どちらかといえば賛成」1点、「どちらかといえば反対」-0点、「反対」-2点で換算すれば、平均値-0.2となる。男女別では、男性の平均値0.1、に対して、女性の平均値-0.9、となり、女性は反対派が多く(78.4%)、男性は賛成派が多い(57.4%)。

第三に、「男女別定年制」(1つに○)についての設問では(無回答0.3%)、

「差別にあたる」	48.0%(男39.7%, 女68.2%)
「どちらともいえない」	36.2%(男42.7%, 女21.2%)
「差別とはいえない」	15.5%(男17.6%, 女10.6%)

となり、約半数が差別にあたると回答しているが、男女別で見ると、女性の7割近くが「差別だ」としている。この設問は、「男は外、女は家庭」との相関が強く(表3)、「男は外、女は家庭」に反対の者ほど「男女別定年制」を差別だとしている。特に、女性ではこの傾向は顕著である。

表3 「男は外、女は家庭」と「男女別定年制」との相関(%)

男は外 \ 定年制	差別にあたる	差別とはいえない	どちらともいえない
賛成	21.7	43.5	34.8
どちらかといえば賛成	33.6	20.3	46.1
どちらかといえば反対	54.6	12.1	33.3
反対	80.0	3.2	16.8
計	48.6	15.4	36.0

第四に、企業に対して、一定数以上の障害者を雇用する義務がある「障害者雇用制度」(1つに○)について(無回答0.7%)、

「この制度はよい」	51.7%(男48.6%, 女60.1%)
-----------	-----------------------

「この制度はよくない」 0.3%(男 0.5%, 女 0.0%)

「いちがいに言えない」 47.3%(男50.9%, 女39.9%)

となっている。男性に「いちがいに言えない」が多く、女性に「この制度はよい」が多いという逆転した結果が出ている。次章で詳しく検討する「同和認識スコア」との相関は全く見られないが、「充実体験・参加スコア」との相関は次の様にある程度見られる。

充実体験・参加スコアが高い：「この制度はよい」57.8%、「いちがいに言えない」42.2%

充実体験・参加スコアが低い：「この制度はよい」41.2%、「いちがいに言えない」58.8%

第五に、「日本社会への満足度」(1つに○)については(無回答0.9%),

「満足」 5.0%(男 6.5%, 女 1.8%)

「やや満足」 31.5%(男31.5%, 女32.4%)

「やや不満」 44.2%(男42.3%, 女50.0%)

「不満」 18.4%(男19.8%, 女15.9%)

となり、満足派36.5%(男38.0%, 女34.2%)と約3分の1に過ぎない。性差はさほど見られない。

また、「同和認識スコア」との相関では、満足派は、

「高スコア」28.8% <「中高スコア」35.2% = 「中低スコア」34.7% <「低スコア」46.0%

と同和認識が低くなるほど、日本社会への満足度が増す傾向がある程度窺われる。

さらに、「やや不満」及び「不満」と回答した者の「日本社会への不満の理由」(いくつでも○)では、

「正しいことが通らない」 53.6%(男58.9%, 女42.0%)

「学歴が重要視されすぎている」 53.3%(男52.8%, 女54.5%)

「環境破壊に国民が無関心」 44.2%(男42.7%, 女47.3%)

「まじめな者が報われない」 42.2%(男44.0%, 女38.4%)

「社会福祉が不十分」 41.1%(男36.3%, 女51.8%)

「組織の中の間人は、与えられた役割を機械的にしか果たすことができない」

31.1%(男31.9%, 女29.5%)

「貧富の差があり過ぎる」 17.2%(男21.0%, 女 8.9%)

「若者の意見が反映されない」 16.7%(男19.8%, 女 9.8%)

「その他」 12.5%(男15.3%, 女 6.3%)

「治安・風俗が乱れている」 8.6%(男 8.1%, 女 9.8%)

の順であるが、性差が顕著であり、特に男性に多い「正しいことが通らない」は16.9ポイント、女性に多い「社会福祉が不十分」は15.5ポイントの男女差がある。

最後に、「人権侵害経験」(1つに○)であるが、自分自身の「人権が侵害された」と感じる「人権侵害の経験」の有無について(無回答0.5%),

「強くある」 9.9%(男 8.0%, 女14.7%)

「少しある」 16.5%(男12.4%, 女26.5%)

「あまりない」 48.5%(男51.2%, 女42.9%)

「全くない」 24.5%(男28.4%, 女15.9%)

となり、「強くある」+「少しある」を合わせた「経験あり」は26.4%で4人に1人の割合になる。

しかし、性差があり、男性では20.4%、女性では41.2%と、女性では男性の2倍の人権侵害経験がある。

その様子をさらに詳しく、「人権侵害の場面」と「人権侵害の理由」について検討する。「人権侵害の場面」(表4)では、男性は、「学校での教師の態度」40.7%、「いじめ」20.9%、「学校での校則・体罰」19.8%が代表的であるが、女性の場合、「学校での教師の態度」31.4%、「父母などの態度」25.7%、「友人との関係で」15.7%の順となる。

「人権侵害の理由」(表5)では、男性の75%が「考え方・信条の違い」であるのに対して、女性では54%が「女ということ」になっている。また、「人権侵害の場面」毎に見た「人権侵害の理由」(表6)では、「女」という理由の場面は、「恋愛」「就職活動を通して」「父母などの態度」「部活動」が高い割合になっている。

表4 人権侵害の場面(%)

場面	男	女	計
学校での校則・体罰	19.8	11.4	16.0
学校での教師の態度	40.7	31.4	36.5
学校での進路指導の時	8.1	10.0	9.0
部活動において	14.0	7.1	10.9
就職活動を通して	4.7	8.6	6.4
いじめ	20.9	14.3	17.9
友人との関係で	15.1	15.7	15.4
恋愛において	0.0	4.3	1.9
父母などの態度	7.0	25.7	15.4
近所とのつきあいで	4.7	5.7	5.1
その他	5.8	10.0	7.7

表5 「人権侵害の理由」(%)

理由	男	女	計
障害者ということ	2.4	1.5	2.0
「同和地区」出身ということ	0.0	6.0	2.7
女ということ	0.0	53.7	24.0
家庭環境のことで	9.6	9.0	9.3
身体的特徴のことで	13.3	6.0	10.0
考え方・信条の違い	74.7	34.3	56.7
その他の理由で	16.9	17.9	17.3
特に理由もなく	25.3	17.9	22.0

しかし、不思議なことがある。基本的人権が保障されているかどうかの項目についてそれぞれ、「全く思わない」-2点、「あまり思わない」-1点、「少し思う」1点、「とても思う」2点としてスコアをとり、平均値を求めると、

「今の日本では、人権は十分守られている」 -0.2点(男 -0.2, 女 -0.3)

「国・自治体は人権を守るために努力している」 -0.6点(男 -0.7, 女 -0.4)

「国民一人一人の人権意識は高まっている」 -0.2点(男 -0.3, 女 0.0)

と全体的には厳しいマイナス評価である。しかし男女別の平均値では、女性の方が保障されていると考えているのである。特に、「国民一人一人の人権意識は高まっている」では、肯定派は、男性では36.6%、女性では50.9%で、女性の方が寛容な見方をしている。この点について、執筆者のゼミで女性の学生にこういう結果になった理由を尋ねたところ、次のような回答が返ってきた。

「女だということできやすい思いをすることも確かですが、逆に、女だからということで大事にされている面もあって、そういう設問もあれば、もっとわかりやすいんじゃないでしょうか。」

表 6 人権侵害経験の場面毎に見た理由の男女別構成比(%)

場面	理由	性別	障害者	同和地区出身	女	家庭環境	身体的特徴	考え方の違い	その他の理由	特に理由なく	計
学校での校則・体罰		男	-	-	-	-	-	80.0	-	20.0	100(15)
		女	-	-	-	-	-	37.5	25.0	37.5	100(8)
学校での教師の態度		男	-	-	-	8.6	5.7	60.0	17.1	8.6	100(35)
		女	-	4.8	28.6	9.5	-	28.6	14.3	14.3	100(21)
学校での進路指導の時		男	-	-	-	-	-	57.1	14.3	28.6	100(7)
		女	-	-	28.6	-	-	42.9	28.6	-	100(7)
部活動において		男	8.3	-	-	-	-	58.3	-	33.3	100(12)
		女	-	-	60.0	-	-	20.0	-	20.0	100(5)
就職活動を通して		男	-	-	-	-	-	50.0	25.0	25.0	100(4)
		女	-	16.7	83.3	-	-	-	-	-	100(6)
いじめ		男	5.6	-	-	-	33.3	11.1	11.1	38.9	100(18)
		女	-	-	-	-	11.1	22.2	11.1	55.6	100(9)
友人との関係で		男	-	-	-	8.3	25.0	50.0	8.3	8.3	100(12)
		女	-	9.1	-	9.1	18.2	45.5	18.2	-	100(11)
恋愛において		男	-	-	-	-	-	-	-	-	-
		女	-	-	100.0	-	-	-	-	-	-
父母などの態度		男	-	-	-	50.0	-	50.0	-	-	100(6)
		女	-	5.6	72.2	5.6	5.6	11.1	-	-	100(18)
近所とのつきあいで		男	-	-	-	25.0	-	75.0	-	-	100(4)
		女	-	-	50.0	-	-	25.0	25.0	-	100(4)
その他		男	-	-	-	-	-	40.0	60.0	-	100(5)
		女	16.7	-	33.3	33.3	-	-	16.7	-	100(6)

()内は実数

つまり、小さな時から、女だからということで役割を免除されたり、できなくてもひどい失敗感を抱くことから免れたりということがあり、それが逆に「なぜ」という思いとともに、時にはそれに満足する面とが混じった感情を持たされているのであろう。

3. 参加・体験

まず、中学や高校時代に「自分もやればできるんだ」「やった!」と思えるような体験を問う「充実体験」について、以下のようになっている。

「充実体験：中学」の場合(無回答0.9%)

「強くある」：40.2%(男40.9%, 女39.6%)

「少しはある」：49.2%(男46.9%, 女56.2%)

「ない」：9.7%(男12.2%, 女4.1%)

「充実体験：高校」の場合(無回答0.7%)

「強くある」：32.2%(男34.8%, 女26.6%)

「少しはある」：50.1%(男47.0%, 女58.6%)

「ない」：17.0%(男18.2%, 女14.8%)

以上のように、中学時代に比べると高校では充実体験が減少している。その内容(表7)であるが、中・高とも「授業・テスト」「部活動」が大きな位置を占めているが、高校では、その二つが10ポイント以上減少し、代わって「学校行事」「友達とのつきあい」「趣味や遊び」が増える。また、「生徒会活動」「塾などでの勉強」も半減する。

表7 中学・高校における充実体験の内容(%)

充実体験の内容	中学	高校
授業・テスト	56.0	41.0
学校行事	25.3	33.3
部活動	53.7	42.7
生徒会活動	11.9	4.9
塾などでの勉強	10.3	4.9
友達とのつきあい	16.1	24.4
趣味や遊び	18.5	27.0
学校外での行事・活動	5.1	5.3
特技・技能の習得	9.3	7.4
その他	0.2	0.6

次に、子ども会、ジュニアリーダー、その他の少年団体活動、ボランティア活動などの「地域活動経験」(表8)については、性差はほとんど関係していない。全国的傾向でもあるが、「積極的参加者」の割合が、小学校37.8%、中学校15.5%、高校6.4%と、上級校へ行く毎に半減する傾向がある。これは「消極的参加者」の割合も同様である。

最後に、現在、大学あるいは地域における「グループ活動への参加」については(無回答1.7%)、
「加入」 51.7%(男49.2%, 女60.5%)

表8 小・中・高校における地域活動経験(%)

地域活動経験	小学校	中学校	高校
リーダーとして積極的に参加	13.6	5.2	1.9
リーダーでないが積極的に参加	24.2	10.3	4.5
消極的参加	33.9	17.7	8.3
ほとんど参加せず	27.8	64.0	83.0
無回答	0.5	2.8	2.3

「以前加入」 9.9%(男7.8%, 女15.6%)

「未加入」 36.7%(男43.0%, 女24.0%)

で、「加入」と「以前加入」のグループ活動経験者は61.6%(男57.0%, 女76.1%)となり、女性の活発さが目立つ結果となっている。

グループ活動経験者の「グループ・サークル活動の内容」は、

「スポーツ」	67.4%(男68.2%, 女66.1%)
「文化・趣味・教養」	39.2%(男40.8%, 女36.3%)
「親睦・情報交換」	7.8%(男6.3%, 女10.5%)
「社会奉仕・ボランティア活動」	4.9%(男1.8%, 女10.5%)
「社会活動(環境保護・住民・消費者運動など)」	2.3%(男3.6%, 女0.0%)
「地域活動(地域活性化事業など)」	0.3%(男0.4%, 女0.0%)
「宗教活動」	0.3%(男0.4%, 女0.0%)
「その他」	1.4%(男2.2%, 女0.0%)

の順である。男女差が顕著なものは、「社会奉仕・ボランティア活動」に女性が多いことであるが、男性は少数ではあるが「社会活動」「地域活動」に加わっており、加入グループの差がここに現われている。

続いて、「現在の学生生活」(3つまで○)をどのように過ごしているのかについてであるが、有効回答者570人について、

「遊んだり、飲んだりするのを楽しみにしている」	38.4%(男41.6%, 女30.8%)
「専門に関する勉強に取り組んでいる」	37.7%(男37.7%, 女37.9%)
「アルバイトに精を出している」	30.7%(男28.2%, 女36.7%)
「スポーツ系サークルの活動を熱心にやっている」	23.7%(男25.2%, 女20.1%)
「自分の関心ある分野の勉強をしている」	22.6%(男22.7%, 女22.5%)
「特に何もしていない」	14.6%(男15.2%, 女13.0%)
「生きる目的が分からなく、悩んでいる」	10.2%(男10.5%, 女9.5%)
「文化系サークルの活動を熱心にやっている」	9.8%(男8.0%, 女14.2%)
「その他」	6.3%(男6.2%, 女6.5%)
「ボランティア活動を熱心にやっている」	1.4%(男0.5%, 女3.6%)
「生協活動に関わっている」	1.1%(男1.5%, 女0.0%)
「自治会活動に関わっている」	0.2%(男0.2%, 女0.0%)

の順である。性差が顕著なのは、「遊んだり、飲んだり」が男性に10ポイントほど多いことである。

4. 将来展望

「卒業後の進路」	については(無回答0.7%)、
「大学院などに進学」	22.3%(男25.7%, 女14.7%)
「就職」	59.8%(男54.4%, 女74.1%)
「まだ考えていない」	15.7%(男18.2%, 女10.0%)
「その他」	1.6%(男 1.7%, 女 1.2%)

という回答である。女性に就職が多いのは、女性の大半が教育学部(大学院がない)で、地元での教師や公務員志望が多いためである。

第2章 人権問題(同和問題)に関する「同和認識スコア」から見た学生の人権意識

同和認識スコアについては、まず、部落問題についての認識の程度を、「全く知らない」-2点、「あまり知らない」-1点、「少し知っている」1点、「よく知っている」2点で換算する。それぞれの項目の平均値は、

「部落の起源などの歴史」	0.5点(男 0.4, 女 0.9)
「過去の部落の実態」	0.1点(男-0.1, 女 0.4)
「部落解放運動の歴史や現状」	-0.3点(男-0.3, 女-0.0)
「現在の部落の実態」	-0.6点(男-0.7, 女-0.1)
「同和対策事業の内容」	-1.2点(男-1.3, 女-0.9)
「同和対策審議会答申の内容」	-1.3点(男-1.4, 女-1.1)

の順となる。この結果から、歴史的な背景や事実についての認識は進んでいると感じているものの、現状やどのような対策が行なわれているかの認識は遅れていると考えられる。そして、この各項目のスコアを回答者毎に集計したのが「同和認識スコア」である。6項目あるので、最高12点、最低-12点となる。回答者全員(567人)の平均値は-2.8点、標準偏差5.0となる。性別では、男-3.5点、女-0.9点と圧倒的に女性の方が認識度が高い。これを、

「高スコア」(12~4点)	: 10.4%(男 7.0%, 女18.3%)
「中高スコア」(3~0点)	: 24.5%(男22.4%, 女29.6%)
「中低スコア」(-1~-6点)	: 40.6%(男41.0%, 女39.6%)
「低スコア」(-7~-12点)	: 24.5%(男29.6%, 女12.4%)

とリコードし、集計に用いた。

「同和認識スコア」との相関関係が顕著なのは、先ほど検討した性差のほかに、出身県、「同和学习経験」スコア、「同和問題の見聞媒体」スコア、「同和教育の意味」、「同和教育推進について」、「男女別定年制」、「親しい友人の偏見に対する対応」、「特別対策について」、「10年前との同和問題の変化」などである。

まず、出身県との関係(表9)であるが、表に見るように、鳥取県、続いて広島県に「高スコア」の者の率が高くなっている。男女でもほぼこの傾向は共通している。

1. 同和教育について

「同和学习経験」(いくつでも○)については、

表9 出身県と「同和認識スコア」との相関(%)

県	スコア	低スコア	中低スコア	中高スコア	高スコア
鳥取県		10.6	43.9	29.4	16.1
島根県		18.5	44.4	37.0	0.0
岡山県		27.5	49.0	19.6	3.9
兵庫県		29.6	37.0	23.5	9.9
広島県		25.0	39.3	25.0	10.7
山口県		20.0	20.0	60.0	0.0
大阪府		32.6	43.5	19.6	4.3
京都府		37.5	45.8	8.3	8.3
その他		37.4	35.4	17.2	10.1
計		24.2	41.2	24.4	10.3

「小学校の授業」	67.8%(男65.6%, 女73.1%)
「中学校の授業」	82.1%(男79.5%, 女88.3%)
「高校の授業」	64.3%(男60.4%, 女73.7%)
「大学の授業」	9.0%(男 5.9%, 女16.4%)
「その他」	0.9%(男 0.7%, 女 1.2%)
「学校で学習したことがない」	6.6%(男 6.7%, 女 6.4%)

となっている。各回答者毎に、「学校で学習したことがない」以外の項目への○の数をカウントすると、

「0点」	6.4%(男 6.7%, 女 5.8%)
「1点」	17.2%(男20.8%, 女 8.8%)
「2点」	28.5%(男30.2%, 女24.6%)
「3点」	41.4%(男38.4%, 女48.5%)
「4点」	6.4%(男 4.0%, 女12.3%)

となり、平均値は2.24点(男2.12点, 女2.53点)である。つまり、93%程度が学校等で平均2回程度の学習経験を持っているのである。

こうした背景から、「同和地区の存在を知った認知経路」(1つに○)については、性差は全くなく、「学校の授業で」73.4%、「父母から」10.1%、「はっきり覚えていない」5.6%、「テレビ・ラジオなどから」3.1%、「友人から」2.3%、「祖父母から」1.2%、「同和地区を知らない」1.2%、「書籍で」0.9%、「講演会・学習会で」0.9%、「近所の人から」0.5%、「広報紙・冊子で」0.3%、無回答0.5%という結果となっている。つまり、

「学校の授業」という制度的なもの	: 73.4%
「父母・友人・祖父母・近所」というパーソナルなもの	: 14.1%
「テレビ・ラジオ、書籍、広報紙、講演会」などの啓発・マスメディア	: 4.3%

というように特別措置法の下での制度的な教育・啓発が大きな力を持ってきたことを如実に示して

いる。そのことは、「同和学習経験」数がある者は、7～8割が「学校の授業」を挙げている一方、「同和地区を知らない」の85.7%、「マスメディア・啓発」の46.7%、「覚えていない」の25.0%が「同和学習経験」数0点となっていることにも現われている。

さて、「同和学習経験」数と「同和認識スコア」との相関については、

「高スコア」：「0点」1.7%、「1点」10.2%、「2点」27.1%、「3点」47.5%、「4点」13.6%

「中高スコア」：「0点」3.6%、「1点」8.6%、「2点」33.8%、「3点」44.6%、「4点」9.4%

「中低スコア」：「0点」4.8%、「1点」15.7%、「2点」29.1%、「3点」44.8%、「4点」5.7%

「低スコア」：「0点」13.7%、「1点」30.9%、「2点」23.7%、「3点」29.5%、「4点」2.2%

表10 「同和教育推進についての考え」と「同和教育の意味」の相関(%)

同和教育について	部落差別がよく分かった	人権問題を考えるきっかけになった	視野が広がった	社会を見る目が変わった	部落差別だけを問題にするのが疑問	部落を変に意識	押しつけがましい	深まりがなく退屈	自分には関係のない問題	特に何も感じなかった	その他	計
ぜひともやるべきだ	69.4	44.6	25.6	17.4	14.0	19.0	5.8	5.8	6.6	1.7	2.5	100.0
やるべきだが進め方に問題	44.4	31.5	21.0	24.2	29.8	30.6	17.7	29.0	7.3	1.6	3.2	100.0
人権教育と名称を変える	50.9	33.9	21.1	15.2	33.9	31.6	14.0	14.6	5.3	0.6	2.9	100.0
必要とは思わない	33.3	5.6	11.1	5.6	11.1	11.1	22.2	5.6	11.1	22.2	0.0	100.0
やらない方がいい	30.0	12.0	14.0	18.0	44.0	70.0	32.0	22.0	10.0	6.0	4.0	100.0
わからない	21.2	15.2	15.2	15.2	15.2	36.4	21.2	21.2	9.1	18.2	9.1	100.0
その他	33.3	16.7	16.7	33.3	33.3	66.7	16.7	0.0	16.7	0.0	33.3	100.0

と、「高スコア」の6割以上が3回以上の学習経験がある。それに対して、「低スコア」では、逆に4割以上が1回以下である。

第三に、これまで経験してきた「同和教育の意味」(いくつでも○)について、有効回答者532人の内訳は、

「部落差別がよく分かった」	48.5%(男44.5%, 女57.9%)
「部落を変に意識するようになった」	31.8%(男29.0%, 女38.4%)
「人権問題を考えるきっかけになった」	31.4%(男29.0%, 女37.1%)
「部落差別だけを問題にするのか疑問」	27.6%(男26.0%, 女31.4%)
「視野が広がった」	20.7%(男20.6%, 女20.8%)
「社会を見る目が変わった」	17.9%(男16.4%, 女21.4%)
「深まりがなく退屈だった」	16.7%(男15.5%, 女19.5%)
「押しつけがましく感じた」	15.6%(男16.9%, 女12.6%)
「自分には関係ない問題だと思った」	7.0%(男 8.3%, 女 3.8%)
「その他」	3.8%(男 4.8%, 女 1.3%)
「特に何も感じなかった」	3.4%(男 4.6%, 女 0.6%)

の順である。

そうした経験から、「同和教育推進についての考え」(1つに○)を聞いたところ(無回答1.9%)、

「人権教育と名称を変え、内容を充実すべきだ」	31.0%(男30.2%, 女34.7%)
「やるべきだが、現在の進め方には問題がある」	22.3%(男20.8%, 女27.1%)
「ぜひともやるべきだ」	21.9%(男23.9%, 女18.8%)
「やらない方がいい」	9.2%(男 9.1%, 女10.0%)
「わからない」	8.7%(男 9.1%, 女 8.2%)
「必要とは思わない」	3.7%(男 5.1%, 女 0.6%)
「その他」	1.4%(男 1.8%, 女 0.6%)

という結果が出た。

「同和教育の意味」と「同和教育推進についての考え」には相関(表10)が見られ、同和教育を「ぜひともやるべきだ」と回答した7割近くが「部落差別がよく分かった」、45%が「人権問題を考えるきっかけになった」、26%が「視野が広がった」と肯定的な回答をしている。「やるべきだが、現在の進め方には問題がある」と「人権教育と名称を変え、内容を充実すべきだ」では、「部落差別がよく分かった」「人権問題を考えるきっかけになった」がそれぞれ2割程度減少し、それに代わって、「部落差別だけを問題にするのが疑問」「部落を変に意識するようになった」が3割程度に増えている。また、特に、「やるべきだが、現在の進め方には問題がある」と回答した3割近くが「深まりがなく退屈だった」としている。次に、「必要とは思わない」と回答した者では、22%が「特に何も感じなかった」としているのが特徴的である。最後に、「やらない方がいい」と回答した者は、7割が「部落を変に意識するようになった」、44%が「部落差別だけを問題にするのが疑問」、32%が「押しつけがましい」としており、積極推進派と対照的な結果が出ている。

さて、この両者と「同和認識スコア」との相関についてであるが、「同和教育の意味」の場合、

「部落差別がよく分かった」	: 「高スコア」69.0% > 「低スコア」32.2%
「人権問題を考えるきっかけになった」	: 「高スコア」50.0% > 「低スコア」23.7%
「部落差別だけを問題にするのが疑問」	: 「高スコア」36.2% > 「低スコア」23.7%

「特に何も感じなかった」 : 「高スコア」 0.0% < 「低スコア」 10.2%
 となっている。「高スコア」では「人権問題を考えるきっかけになった」「部落差別がよく分かった」が「低スコア」の倍以上の数値が出ている一方で、「疑問」も高くなり、「特に何も感じなかった」が0%であることから、問題意識も生じているといえる。これらの項目以外では、特に大きな変化はない。

「同和教育推進についての考え」については、「同和認識スコア」との明確な相関が見られる(表11)。すなわち、「ぜひともやるべきだ」「やるべきだが、現在の進め方には問題がある」「人権教育と名称を変え、内容を充実すべきだ」を「推進派」、「必要とは思わない」「やらない方がいい」「わからない」を「消極派」とすると、

「高スコア」 : 「推進派」 93.1%、「消極派」 6.8%

「中高スコア」 : 「推進派」 88.3%、「消極派」 11.0%

「中低スコア」 : 「推進派」 78.8%、「消極派」 19.0%

「低スコア」 : 「推進派」 54.8%、「消極派」 43.7%

となり、認識が高いほど推進派が多くなる様子が明らかである。

表11 「同和教育推進についての考え」と「同和認識スコア」との相関(%)

同和教育推進	スコア				
	低スコア	中低スコア	中高スコア	高スコア	計
ぜひともやるべきだ	16.1	25.1	20.4	31.0	22.4
やるべきだが、進め方が問題	15.3	21.1	29.9	29.3	22.7
人権教育と名称を変える	23.4	32.6	38.0	32.8	31.7
必要とは思わない	8.0	2.2	2.2	1.7	3.6
やらない方がいい	10.9	11.5	6.6	3.4	9.3
わからない	24.8	5.3	2.2	1.7	8.9
その他	1.5	2.2	0.7	0.0	1.4

第四に、「同和問題の見聞媒体」(いくつでも○)については、有効回答者568人の内訳は、

「映画」	45.4%(男41.1%, 女55.6%)
「新聞の記事」	40.5%(男37.6%, 女47.3%)
「テレビ番組」	32.9%(男30.6%, 女38.5%)
「書籍」	32.6%(男33.3%, 女30.8%)
「地方自治体の広報紙」	16.2%(男13.3%, 女23.1%)
「雑誌の記事」	13.7%(男12.0%, 女17.8%)
「特にない」	13.4%(男16.5%, 女 5.9%)
「地方自治体の発行した冊子・パンフレット」	12.9%(男11.5%, 女16.0%)

の順である。また、各回答者が○をつけた数は、平均値1.9(男1.8, 女2.3)、最大値7、最小値0となっている。女性が男性よりも多くのメディアに接していることがわかる。「同和認識スコア」との相関では、各スコアの平均値は、

「高スコア」2.8 > 「中高スコア」2.3 > 「中低スコア」2.0 > 「低スコア」1.1
 で、明確にスコアが高くなるほど、多くの媒体と接触していることがわかる。

第五に、現在特に「興味・関心があり、意識的に考えている人権問題」(5つに○)について、有効回答者571人の内訳は、

「環境問題」	47.5%(男47.6%, 女47.1%)
「エイズに関する問題」	44.7%(男44.4%, 女45.3%)
「男女差別の問題」	37.3%(男31.2%, 女51.8%)
「外国人労働者の問題」	28.7%(男31.2%, 女22.9%)
「在日朝鮮人・韓国人問題」	26.8%(男26.4%, 女27.6%)
「学歴の問題」	24.7%(男24.9%, 女24.1%)
「高齢者問題」	23.8%(男22.9%, 女25.9%)
「いじめ問題」	23.5%(男22.9%, 女24.7%)
「校則・体罰の問題」	23.3%(男23.2%, 女23.5%)
「障害者・児問題」	22.1%(男18.7%, 女30.0%)
「核兵器や平和の問題」	21.5%(男23.7%, 女16.5%)
「アパルトヘイト問題」	21.2%(男25.7%, 女10.6%)
「社会福祉の問題」	19.6%(男17.0%, 女25.9%)
「登校拒否・不登校問題」	17.9%(男12.5%, 女30.6%)
「貧困・飢餓の問題」	17.7%(男18.0%, 女17.1%)
「日の丸・君が代問題」	17.3%(男19.2%, 女12.9%)
「差別発言・差別用語」	15.9%(男16.7%, 女14.1%)
「部落問題」	14.4%(男14.2%, 女14.7%)
「指紋押捺問題」	9.6%(男11.5%, 女 5.3%)
「『ちびくろサンボ』問題」	7.0%(男 8.0%, 女 4.7%)
「アイヌ問題」	6.0%(男 6.5%, 女 4.7%)
「アムネ스티活動」	2.8%(男 3.0%, 女 2.4%)
「特にない」	2.6%(男 3.7%, 女 0.0%)
「その他」	0.9%(男 0.7%, 女 1.2%)

の順である。性差が顕著にでるのは、男性に多い「外国人労働者の問題」「アパルトヘイト問題」、女性に多い「男女差別の問題」「障害者・児問題」「登校拒否・不登校問題」である。

「同和認識スコア」との相関(表12)では、明確な差が出るのは次の項目である。

「部落問題」	: 「高スコア」28.8% > 「中高スコア」19.4% > 「中低スコア」11.3% > 「低スコア」8.8%
「核兵器や平和の問題」	: 「高スコア」15.3% < 「中高スコア」18.7% < 「中低スコア」23.0% < 「低スコア」24.8%

全体的に、「高スコア」では興味・関心が分散しているが、「低スコア」になるほど特定のものに集中する傾向が見られる。例えば、「環境問題」では「低スコア」51.1%に対して「高スコア」37.3%、「エイズ」では「低スコア」48.9%に対して「高スコア」35.6%である。この背景には、回答形式が「5つに○」のため、「低スコア」ではその時々々の時勢に合った問題を指摘する傾向が強いものに対して、「高スコア」では自分の関心領域がある程度定まっているため、関心領域の分散化につながっていると考えられる。

表12 「興味関心のある人権問題」と「同和認識スコア」との相関

順位 スコア	1	2	3	4	5	6	7
高スコア	校則・体罰 39.0%	環境問題 37.3%	エイズ 35.6%	男女差別 35.6%	いじめ 33.9%	部落問題 28.8%	在日朝鮮人 28.8%
中高スコア	環境問題 46.0%	エイズ 45.3%	男女差別 43.9%	在日朝鮮人 36.0%	外国人労働者 26.6%	障害者・児 24.5%	高齢者 24.5%
中低スコア	環境問題 48.7%	エイズ 44.3%	男女差別 37.4%	外国人労働者 33.0%	在日朝鮮人 26.5%	学歴 26.5%	障害者・児 23.9%
低スコア	環境問題 51.1%	エイズ 48.9%	男女差別 32.1%	高齢者 27.7%	学歴 27.0%	アパルトヘイト 24.8%	外国人労働者 24.8%

(備考：低スコアには、第8番目に、「核兵器や平和の問題」24.8%が同率で入るが、割愛した。)

2. 社会観・対人関係

まず、「男女別定年制」と「同和認識スコア」との相関は、

「高スコア」：「差別だ」64.4%、「どちらとも」28.8%、「差別ではない」6.8%

「中高スコア」：「差別だ」54.0%、「どちらとも」33.1%、「差別ではない」12.9%

「中低スコア」：「差別だ」49.6%、「どちらとも」31.7%、「差別ではない」18.7%

「低スコア」：「差別だ」33.1%、「どちらとも」50.4%、「差別ではない」16.5%

となっている。この点は、男女別で見ても同様な傾向が見られることから、同和認識が進む中で、性差を理由に格差をつけることへの疑問視が生まれるといえる。

ところで、「男は外、女は家庭」については、「同和認識スコア」との相関は、全体的にはスコアが高くなるほど「反対」が増える傾向にあるが明瞭でない。

次に、「同和地区や同和地区出身者に対する差別が現在現われると思われる場面」(いくつでも○)として、有効回答者数570人の内訳は、

「結婚の時」 77.7%(男72.8%, 女89.4%)

「就職の時」 54.7%(男53.3%, 女58.2%)

「うわさ話や雑談の時」 30.7%(男30.3%, 女31.8%)

「隣近所でのつきあい」 22.6%(男23.8%, 女20.0%)

「職場でのつきあい」 16.3%(男15.8%, 女17.6%)

「転居するとき」 15.4%(男15.5%, 女15.3%)

「喧嘩や口論の時」 13.0%(男12.5%, 女14.1%)

「不動産の売買の時」 8.9%(男6.5%, 女14.7%)

「子どものつきあい」 8.4%(男10.3%, 女4.1%)

「特に差別はない」 7.0%(男8.5%, 女3.5%)

「仕事の取引の時」 5.8%(男5.8%, 女5.9%)

「入学の時」 5.3%(男6.8%, 女1.8%)

「その他」 3.9%(男4.8%, 女1.8%)

の順である。よく指摘される「結婚」「就職」が前面に出ている。「同和認識スコア」との相関では、「特に差別はない」が「低スコア」で高くなっていることである(「低スコア」11.0% > 「中低スコア」)

ア」7.0% > 「中高スコア」5.8% > 「高スコア」1.7%)。

第三に、「日頃親しくつきあっている人(学内の友人, 職場・近所の人など)が同和地区出身であるとわかった場合の対応」(1つに○)であるが(無回答0.5%),

「親しくつきあう」 79.8%(男79.1%, 女82.9%)

「何となく気をつかう」 19.1%(男20.1%, 女17.1%)

「避けていく」 0.3%(男 0.5%, 女 0.0%)

「つきあいをやめる」 0.2%(男 0.2%, 女 0.0%)

と圧倒的多数がこだわりなくこれまで同様につきあうと回答している。「避けていく」は「同和認識スコア」の「低スコア」と「中低スコア」にそれぞれ1人, 「つきあいをやめる」は「中低スコア」に1人となっている。

第四に、「親しい友人が, 同和問題について, 強い偏見を持っていることがわかった場合の対応」(1つに○)についての設問では(無回答 0.7%),

「偏見を正すよう努力」 27.0%(男23.9%, 女34.7%)

「誤りは指摘する」 55.1%(男55.1%, 女56.5%)

「とくに何もしない」 17.2%(男20.9%, 女 8.8%)

となっており, 何らかの働きかけをする者は, 82.1%(男79.0%, 女91.2%)に上り, 特に女性の積極性が目立っている。「同和認識スコア」との相関(表13)では, 「高スコア」になるほど相手の変革を求める能動的な行動への志向が高まる。

表13 「友人の偏見に対する対応」と「同和認識スコア」との相関 (%)

友人の偏見	スコア				計
	低スコア	中低スコア	中高スコア	高スコア	
偏見を正すよう努力	18.1	25.3	34.5	40.7	27.4
誤りは指摘する	50.0	61.1	52.5	54.2	55.6
とくに何もしない	31.9	13.5	12.9	5.1	17.0

最後に、「結婚相手が同和地区出身の人だということがわかり, 親や親戚が反対しているケース」(1つに○)についての設問では(無回答0.5%),

「当人同士の意志を貫くとともに, 家族や親戚の考えを変える努力をするべきだ」

53.6%(男54.5%, 女52.4%)

「当人同士の意志が強ければしかたがない」

32.5%(男32.3%, 女33.5%)

「家族や親戚の反対があれば, 無理に結婚しないほうがいい」

4.0%(男 3.2%, 女 5.9%)

「結婚を認めるべきではない」

0.3%(男 0.0%, 女 1.2%)

「その他」

1.7%(男 2.5%, 女 0.0%)

「わからない」

7.3%(男 7.5%, 女 7.1%)

となり, 当人同士の意志の尊重が大事と考える者が86.1%(男86.8%, 女85.9%)に達する。この問題についての「同和認識スコア」との相関はほとんどなく, 「高スコア」にも1人, 「結婚を認めるべきではない」とする者があることから, この問題は認識レベルとはまた違ったレベルの問題であるといえる。

3. 同和対策について

まず、「部落問題解決のための今後の課題」（3つまで○）について、有効回答者562人の内訳は、

「差別意識をなくす社会教育、啓発活動を徹底させる」	50.9% (男49.0%, 女55.4%)
「地区周辺の人との交流を促進し、町づくりをすすめる」	22.8% (男18.3%, 女33.3%)
「同和地区の住宅環境や生活環境を改善・整備する」	21.7% (男23.6%, 女17.3%)
「同和地区の人が、積極的に行政や同和地区外の人に働きかける」	19.8% (男20.6%, 女17.9%)
「口に出さず、そっとしておけば差別は自然に無くなる」	19.0% (男22.6%, 女10.7%)
「同和地区の人が、十分に教育を受けられるようにし、社会的な生活能力を高める」	17.6% (男17.0%, 女19.0%)
「同和地区の人が、分散して住むようにする」	16.9% (男14.0%, 女23.8%)
「どのようにしても差別は無くならない」	13.0% (男16.0%, 女6.0%)
「同和地区の人の収入の安定・向上をはかり、生活力を高める」	11.2% (男11.9%, 女9.5%)
「その他」	6.2% (男6.6%, 女5.4%)

のようになり、「教育・啓発」「交流」が前面に出ていることがわかる。性差が目立つのは、「口に出さず、そっとしておけば差別は自然に無くなる」「どのようにしても差別は無くならない」が男性に

表14 「同和問題解決のための今後の課題」と「同和認識スコア」との相関 (%)

今後の課題	スコア				計
	低スコア	中低スコア	中高スコア	高スコア	
収入の安定・向上	14.2	10.3	12.9	3.4	11.2
住宅・生活環境を改善・整備	21.6	24.1	21.6	13.6	21.8
十分な教育	15.7	16.1	21.6	18.6	17.6
同和地区の人が、積極的に働きかける	15.7	23.2	19.4	16.9	19.8
同和地区の人が、分散して住む	15.7	18.3	15.8	18.6	17.1
差別意識をなくす社会教育・啓発	42.5	49.1	56.1	64.4	50.9
地区周辺の人との交流	15.7	19.6	25.9	42.4	22.7
口に出さず、そっとしておく	23.9	23.7	14.4	3.4	19.2
どのようにしても差別は無くならない	17.2	12.1	11.5	10.2	12.9
その他	7.5	6.3	4.3	8.5	6.3

表15 「同和対策について」と「同和認識スコア」との相関 (%)

同和対策	スコア				計
	低スコア	中低スコア	中高スコア	高スコア	
必要である	20.7	20.4	34.1	22.0	24.1
必要な場合に限定すべき	40.7	50.7	50.0	62.7	49.4
これ以上必要ない	4.4	7.1	5.8	10.2	6.5
わからない	34.1	21.8	10.1	5.1	20.1

多く、「地区周辺の人との交流を促進し、町づくりをすすめる」「同和地区の人が、分散して住むようにする」が女性に多い点である。

これについて「同和認識スコア」で見ると(表14)、スコアが高くなるほど「差別意識をなくす社会教育、啓発活動を徹底させる」「地区周辺の人との交流を促進し、町づくりをすすめる」が多数派となり、スコアが低くなるほど「口に出さず、そっとしておけば差別は自然に無くなる」「どのようにしても差別は無くならない」が増える傾向にある。

次に、「同和地区に対する特別対策について」(1つに○)の考えを問う設問では(無回答2.1%)、

「特別対策は必要である」	23.7%(男26.1%, 女19.5%)
「特別対策は必要な場合に限定すべきである」	48.2%(男46.4%, 女55.6%)
「これ以上行なう必要はない」	6.3%(男5.1%, 女9.5%)
「わからない」	19.8%(男22.3%, 女15.4%)

となっており、半数近くは、限定されるべきだと考えている。また、女性に、「限定すべきだ」という意見と「これ以上行なう必要はない」を合わせると、65%に達する点が特徴的である。「同和認識スコア」との相関(表15)では、「特別対策は必要な場合に限定すべきである」の割合が、スコアが高くなるほど多くなる傾向があり、また「これ以上行なう必要はない」は「高スコア」では10.2%と他のレベルと比べて、最高値を示している。また、当然ながら、スコアが低くなるほど「わからない」が増える。

最後に、「10年前と比べて、同和問題は、解決の方向に向かっているかどうか」(1つに○)について(無回答0.9%)、

「かなり解決している」	4.7%(男5.3%, 女3.5%)
「少しは解決している」	38.4%(男34.8%, 女48.2%)
「あまり解決していない」	26.1%(男26.5%, 女25.9%)
「わからない」	29.9%(男33.5%, 女22.4%)

という結果が出ている。解決していると回答しているのは、43.1%(男40.1%, 女51.7%)であるが、3割近くが「わからない」と回答しており、この点は、部落問題学習との関わりが問われ、「同和認識スコア」との相関では、「かなり解決している」と「少しは解決している」を足した「解決派」は、

「高スコア」57.7% > 「中高スコア」55.4% > 「中低スコア」43.2% > 「低スコア」25.6% となる。「あまり解決していない」は各スコアとも23~27%台でほとんど同じという特徴が見られる。そして、「わからない」は、

「高スコア」15.3% < 「中高スコア」18.0% < 「中低スコア」29.3% < 「低スコア」51.1% となり、認識が高くなるに従って、「解決派」が増え、「わからない」が減少するという特徴が顕著である。

まとめと今後の課題

第1章では、大学生の人生観・社会観・参加体験などについて検討し、特に性差に注目した。男女差が顕著に出るのは、次の項目であった。

1) 「興味・関心」では、性別に多いものから3つ挙げると、男性は「自動車」、「職業・勉学」、「異性」、女性は「職業・勉学」、「友人関係」、「技能・資格取得」となり、女性に「職業・勉学」「技能・資格取得」が目立っていた。

- 2) 「風習態度スコア」は全般に相関関係が高いが、特に「手相・占い・お告げ」は女性の6割近くが「気にする」と回答している。
- 3) 『『男は外、女は家庭』の考え方』及び「男女別定年制」については、明確な性差があり、女性の7～8割が問題視しているのに対して、男性では4割程度に過ぎない。
- 4) 「障害者雇用制度」に対しても、女性が制度を肯定的に評価しているのに対して、男性では「一概に言えない」が半数以上を占めている。
- 5) 人権侵害経験は、女性の4割以上が「経験あり」なのに対して、男性はその半分に過ぎない。また、人権侵害経験の場面や理由も性差が大きく、女性の半数が「女ということ」を理由に挙げている。しかし、他方では、現在の日本では「基本的人権が保障されているか」に対しては、女性の方が肯定的な評価を下している。
- 6) 参加体験は、現在のグループ・サークル活動への参加経験が女性の76%を占め、女性の方が活発である。また、「社会奉仕・ボランティア活動」に対して男性よりも関与率が高い。

以上のように、女性の問題意識の高さの一方で、風習や占いなどに傾倒する傾向や現状への肯定的評価というアンビバレントな意識状況にあるといえる。

次に、第2章では、人権問題(同和問題)に関する学生の意識を「同和認識スコア」を使って分析した。「同和認識スコア」については、全般的に言って、「部落の歴史」「過去の部落の実態」は「知っている」のプラス評価であるが、それ以外の4項目(「部落解放運動」「現在の部落の実態」「同和対策事業」「同和対策審議会答申」)はマイナス評価で、特に対策と現状についての理解が弱いことが明らかになった。

- 1) 性別では、女性の認識程度が高く、女性の48%が「高スコア」「中高スコア」なのに対して、男性では29%に過ぎない。
- 2) 出身県では、鳥取県、広島県に「高スコア」が多い。
- 3) 「同和学习経験」数については、「高スコア」の6割以上が3回以上の学習経験があり、「低スコア」では、逆に4割以上が1回以下である。
- 4) 「同和教育の意味」と「同和教育推進についての考え」には相関関係があり、同和教育を積極的推進すべきと考える者ほどこれまでの同和教育経験を肯定的にとらえている。この点は、「部落問題をだけを問題にするのか疑問」「部落を変に意識」などが増えるに従って、現行の同和教育を疑問視する傾向が見られることにも現われている。また、これらの傾向は、「同和認識スコア」との相関が見られ、スコアが高くなるほど、同和教育の推進派が増え(人権教育と名称を変えて実施も含める)、スコアが低いほど消極派が増える。
- 5) 「同和問題の見聞媒体」数は、「同和認識スコア」との相関が明確で、スコアが高くなるほど、多くの媒体に接している。
- 6) 「男女別定年制」については、「高スコア」の6割以上が「差別だ」としているが、「低スコア」では3割程度に過ぎない。
- 7) 「親しい友人の偏見に対する対応」では、「高スコア」になるほど相手の変革を求める「偏見を正す努力をする」が多くなる。
- 8) 「部落問題解決のための今後の課題」は、スコアが高くなるほど「社会教育・啓発」「交流」が多数派となり、スコアが低いほど「口に出さずそっとしておく」「差別は無くならない」が増える。
- 9) 「特別対策について」については、スコアが高くなるほど「必要な場合に限定」が多くなる傾向にある。

10) 「10年前との同和問題の変化」では、スコアが高いほど「解決派」が多くなり、「高スコア」では6割近くに達する。逆にスコアが低いほど「わからない」が増え、「低スコア」では51%である。

以上、「同和認識」には当然ながら「学習経験数」や「接触媒体数」の多さが関係し、またスコアが高いほど、それまでの学習経験を肯定的に評価する傾向があるとともに、関心領域も多様化しているといえる。

ところで、「同和認識スコア」とはあまり相関しないものとして、「結婚相手が同和地区出身の人だということがわかり、親や親戚が反対しているケース」についての設問と、「男は外、女は家庭」の考えについての設問などがある。これらの問題については、認識レベルとはまた違ったレベルの問題であるといえ、今後の検討課題でもある。

最後に、第1章と第2章の関係であるが、青年の意識を問う際に、性別、年齢、職業、結婚などという属性のほかに、「学習」的側面、「参加」経験的側面、「評価」的側面の3側面が重要である^{*)}。ここでは、性別と「学習」的側面からみた学生の人権意識についてのみ考察したが、総合的に学生及び青年の意識をとらえる枠組みについての検討をさらに進める必要がある。

〈註〉

この点については、以下の拙論を参照したい。

「地域活性化と青年の役割に関する予備的考察」『鳥取大学教育学部研究報告：教育科学』第34巻第2号、1992年。

「青年の地域意識と集団活動」『鳥取大学教育学部教育実践研究指導センター研究年報』第2号、1993年。

(1993年4月20日受理)